

## 図書館における資料保存とは

長らく日本の図書館では利用と保存は対立するものだと考えられてきました。利用すればそれだけ資料は傷むから保存にとってはよくない、資料を大切に保存するためには利用を制限するという考え方です。そして、戦後の図書館発展のためのバイブルともいえる『中小都市における公共図書館の運営』（日本図書館協会、1963）、『市民の図書館』（日本図書館協会、1970）は、それまでの保存中心主義こそが図書館発展を阻害してきた元凶だと、「保存」に対する痛烈な批判を展開しました。それ以降、「保存」はないがしろにされてきました。図書館学のカリキュラムの中にも「資料保存」はありません。このことの弊害は少なくないと思います。図書館員は「保存」を考えない、考えなくてよいという環境になってしまったように思います。

しかしそうでしょうか？ 図書館の使命が「資料の利用を保証する」ことであれば、その「利用」は今現在だけでなく数百年後の利用でもあるかもしれません。また、そうやって保存され引き継がれてきた資料を今現在利用していたりもします。であれば利用を保証するためには資料保存は不可欠であり、また保存は図書館の使命である利用の保証のために行うものであるともいえます。図書館における資料保存とは、「利用か保存か」ではなく、また、博物館、美術館などのような「後世に残し引き継ぐ」ためでもなく、「利用のための資料保存」です。

また、図書館資料は博物館、美術館などの資料とその性格を大きく異にしています。状態が千差万別なのはもちろん、資料的な価値も千差万別です。例えば、短期間で役割を終えてしまうものもあれば、公立図書館であれば郷土・地域資料のように、そこにしかないものもあります。また、その価値は図書館の館種や規模、運営方針によって異なってきます。それぞれの図書館で、何のために、何を、いつまで、どのように保存するのかという「保存ニーズ」を把握して取り組まなければなりません。図書館における資料保存の手法は画一的、一律にはできません。それぞれの図書館に応じて、また資料に応じて千差万別とならざるを得ません。

### 利用のための資料保存、5つの方策

すなわち、図書館における資料保存は資料に応じて、予防、点検、代替、修理、廃棄という、大きく5つの方策から選択、組み合わせることで取り進むことになります。資料に応じて、というのは、その資料的価値（保存年限）、利用頻度、資料の状態の3つに応じて、ということです。

この5つの方策の中で最も重要なのは「予防」です。予防こそが図書館における資料保存の要となります。予防というと空調（環境）管理などの大げさなイメージがあるかもし

れません。もちろんそういったこともあります。取扱方法や配架方法といった最も身近で簡単なことが実は最も大切なことです。また、酸性紙対策や保存容器収納、保存製本、災害対策など、予防対策にはさまざまな手法があります。

また、図書館資料は博物館、美術館などと違って、「代替」が可能です。買い替えなどの再入手、マイクロフィルムやデジタルへの媒体変換などがこれにあたります。フィルムは品質や保管条件によっては期待寿命 500 年ともいわれていますが、デジタル化したからといって現物を廃棄することは、長期保存の観点からは危険です。デジタルデータは、最も信頼性の高いハードである光ディスクで数十年の寿命といわれていますし、たともっと長期間の寿命があったにせよ、データを呼び出すソフトの陳腐化が激しいからです。その長期保存については現在さまざまな研究が行われているところですが、現段階では、数年ごとに、そのときそのときのハードとソフトに合わせてデータをマイグレーションするというのが現実的な方法です。その管理費用は膨大なものになります。ですから、「利用」にはデジタルデータですが、「保存」には現段階ではまだ最も信頼性の高いのは紙媒体といえるでしょう。

「予防」や「代替」では有効でない場合にやむをえず「修理」という選択肢があります。この「修理」に対する考え方や注意点については、[テキスト『修理のための基本的な考え方と技術』](#)をご参照ください。

保存なのに「廃棄」という方策が入っていることを奇異に感じるかもしれません。しかし、図書館が収集したものをすべて保存することは現実的ではないし、またナンセンスです。その図書館にとって役割を終えた資料は廃棄することで、大切な資料をきちんと守っていくことも立派な方策の一つです。このことが最も顕著に表れるのが災害により大量に資料が被災したときです。このとき、すべての資料を救済することは現実には不可能です。だから、まず廃棄してもよい資料を選び出すことから「救出作業」は始まるのです。

資料保存の取り組みは、「なぜ保存するのか」、「何を保存するのか」、「いつまで保存するのか」、「ベストな方策は何か」を問うことでもあります。それは自館の資料やあり方、使命を、改めて見つめ直すことにもなります。

※本テキストは『やってみよう資料保存』（日本図書館協会資料保存委員会編 日本図書館協会 2021年）を抜粋・修正・加筆したものです。